

～輝きの子育て～

家族の絆

～ 心の砂漠化を防ぐために ～

どの家庭も今日一日が何事もなく平和であることを願いつつ一日が始まります。明るい太陽の光が窓から射し込むと、それだけで幸せを感じ、今日も一日頑張ろうとそんな気にさせてくれます。子供を送り出し、仕事に出かけ、慌ただしい一日が始まります。家族の誰もが、それぞれに置かれた立場で、その勤めを果し、精一杯頑張り我が家にもどってくる。家庭の中にあっては、疲れが癒され、明るい会話の中に笑いがあり、時に、共に心配し合い、助け合い、喜び、悲しみ、不安のくり返しの中で…夜には心地よい入浴、安らかな眠りの中で今日一日の疲れを取り除きます。

その家庭が今では変質し、崩壊の危機にさらされていると言われます。いまだ、家庭崩壊には至っていないものの、崩壊予備軍のような家庭は確実に増大していると言われます。希薄化する家族の絆をどう取り戻すか？家庭の力を呼び戻そうと問われています。丸山敏秋氏の本「家庭をよくする」を参考に、要約してみたいと思います。

家族の「絆」、「つながり」の意識、連帯感を強くすることの大切さ、それには、まず家族みんなが揃って食事を摂ることの大切さが言われています。豊かで便利な時代になってから食事のあり方が変わってきました。時間をかける必要もなく個々の好みに合わせた食卓でのバラバラの食事が可能になってきました。子供の成長と共に家族揃って食事する機会がだんだん少なくなってくるのは仕方ないことかも知れませんが、小さいうちはできる限りみんなで一緒に食べる、同じ物を食べるように心がけるべきでしょう。小さい子供の「孤食」ほど可哀なものはありません。

「らしさ」の喪失 — このような事を言えば時代錯誤と思われるかも知れませんが、男らしさ、女らしさ、夫らしさ、妻らしさ、母親らしさ、父親らしさ、子供らしさ、若者らしさ、老人らしさ、さまざまな「らしさ」があるはずなのに、それが消え失せようとしています。世の中全体にそうした傾向が強くなりました。母性とか父性も、人は本能として持っています。心理学者の林道義氏はつぎのように指摘しています。「一般的に言うと、母性が不足すると自暴自棄になったり、攻撃的になりがちである。家の中に温かい母性がなければ、子供たちは家に帰りたくないから外の街をほっつき歩くようになり、さらに父性不足からくる規範意識の希薄な道に外れた、アウトロー人間になって暴力を振るうようになる。日本中から温かい明るい家庭が消滅しつつあることが、これらの異常な現象の背後に横たわっているのである」
— 家族破壊（徳間書店） —

「安らぎ」の場であること。 — 安らぎのある環境で暮らすとき、人はクヨクヨしたり、余計な心配はしませんから、生きる力が湧き起こってきます。子供は安らぎのある家庭に身を置くと、スクスクと育ち、いろいろな能力が芽を出し、花を咲かせていきます。育つ環境に安全と安心がなければ、その能力は決して芽吹きません。置かれた環境の人間関係の安定も大切な条件になります。愛が与えられていない寂しさ、それゆえの安心の欠如と言う状況にあつたら、自然に芽生えるはずの子供の能力が発現しません。勿論、それぞれの子供が持つ個性的な能力も芽を出しません。そんな状況にわが子を置くのは、なんと残酷なことでしょう。安らぎの欠けた家庭で子供が健全に育つはずがありません。

それぞれ、家庭の型の違いはあるでしょうが、安らぎのある、気持ち良い居場所がある家庭でありたいものです。

片野 英子